片岡良一

『道草』と漱石の結論

『道草』と漱石の結論

『道草』は漱石の自敍伝小説である。『道草』の主人公は、それをそのまま漱石と見なしてさしつかえないほど、漱石自身を直接に反映している。少くとも『道草』の主人公健三が体験したものは、すべて漱石自身が直接体験したものである。

しかしそういうことは、『道草』に書かれている事実が、『道草』の置かれている特定の期間内ですべて書かれたままの順序で起ったものであることを意味しない。

そういう意味ではこれはやはり小説であった。つまり自敍伝を書く目的で書かれた『道草』ではなく、小説として書かれたものが自敍伝となったのである。

漱石が英国留学から帰って、東京駒込の千駄木町に居を移したのは、恐らく明治三十六年三月はじめのことである。そうして大学と一高とに教鞭をとり出したのは、その年の四月からであった。『道草』は、主人公健三が外国留学から帰って、「千駄木から追分へ出る通りを日に二返づゝ規則のやうに往来し」ているところから、書きはじめられている。『道草』の中で漱石は主人公に自

分は三十六だといわせている。が、明治三十六年には漱石はかぞえ年でいえば、「三十七」であった。

誰でも知っているように、漱石は明治三十八年の一月に、ホトトギスに『吾輩は猫である』の第一回を書き、帝国文学に『倫敦塔』を書き、学燈に『カーライル博物館』を書き、それから矢つぎ早やに『猫』の第二から第八まで、『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『趣味の遺伝』などを書いた。そうした創作活動が、それまでの漱石のこじれた気もちをほぐし、それらの作品への反響が漱石の心を明るくした。漱石はそれまで心の中に深く鬱

屈するものがあって、そのはけ口を求めることが出来ないままに、八方ふさがりの世界にとじこめられているような、だだ黒い焦らだちばかりを感じていたのである。その焦慮と憂鬱の泥沼の中から、このはなばなしい創作活動によって、彼は少なくとも一応は浮び上ることが出来たのであったが、『道草』が置かれた特定の期間というものは、そうした一応の救いが来る前の、漱石が焦慮と憂鬱の泥沼の中に息づまるような毎日を送っていた、その期間の謂いである。それはおよそ漱石が留学から帰った頃からどしどし『猫』を書き出すまで、数字でいえ

ば大体明治三十六年から三十八年（或は三十九年）までの三年間（或は四年間）である。『道草』の作者はそれを健三三十六の年から三十七の年のはじめまでのことに集約したのである。

ただし、『道草』に取扱われている事件は、必ずしもこの三・四年間のことのみには限らない。例えば、漱石の昔の養父塩原昌之助が、人をもって漱石に金の無心を申し込んで来たのは、明治四十二年の三月、即ち漱石が朝日新聞に入社してすでに三つの長篇を書き、そろそろ『それから』に取りかかろうとしていた時のことである。

そうしてその事が片づいたのはその年十一月の末のことであった。従ってこの事件は上記漱石の鬱屈時代をはるかにはみ出していたのであるが、しかし事実は、この期間においても、漱石はやはりこの過去からの因縁のために、多少遠まきのかたちではあっても、絶えずおびやかされていたのである。漱石がそのおびやかしを時間的にちじめ、遠まきの状態から肉迫の状態にあらためて、そのため健三の苦い生活を一そう苦いものとしたのは、この事件を『道草』をつらぬく筋として用い、それによって『道草』に小説的なまとまりを与えようとしたからで

ある。漱石はその筋の上に、彼自身の後の手紙にあるような、「世間全体が癪に障ってたまらない」そうしてそのために自分の「からだを滅茶苦茶に破壊して仕舞」ってかえりみなかった、上記三・四年間の自分のすがたを、最も圧搾したかたちで描き出そうとしたのである。

しかしこの事件を『道草』の筋として取上げる以上、漱石は必然的に、健三とその養父島田との養父子となったそもそもの因縁から現在までの関係に、触れなければならなかった。いきおい実父のことや実父と島田との関係、島田の周囲の人々、その頃から今も島田と健三との

間に介在する健三の周囲の人々、などのことにも筆をつけねばならなかった。と同時に健三の幼時にもさかのぼらねばならなかった。つまり漱石は、「三十六―三十七」の健三と彼の事件とを書くためにそこに来るまでの健三とその周囲とを描かねばならなかったのである。それがおのずから健三の――従って漱石の、その年になるまでの家庭的閲歴を書くことになった。小説『道草』はこうしておのずから漱石の自叙伝としての性質を持つことになったのである。――

以上は小宮豊隆がその著『漱石の芸術』に収めた『道

草』への解説からの、多少の訂補を加えた抜萃である。さすがによく調べたものだし、要を得た解説だと思う。ただこれだけの範囲には『道草』を構成するもう一つの要素である健三とその細君との気もちの齟齬、その齟齬の淵源である細君の父の人となりや生き方、そういう彼の生活を通して語られている当時の社会的風潮などが、すべて語り落されていることになるが、それを補ったら、『道草』を構成する題材やその組みたて方についての説明としては、恐らく間然とするところのないものになろう。要するに『道草』は、主人公健三（漱石自身）とそ

の養父島田（塩原）との関係なり事件なりを経とし、同じ健三と細君との生活態度の齟齬を緯として、その両方に関係ある親類縁者のすがたや彼等の生活ぶりを織りこんだ、自伝的小説なのである。この作のような意味で身辺記録的な、自伝的小説を他には示さなかった漱石の作品として、それだけ特殊な性質を持つものとして珍しくもあれば見どころの多いものにもなっているのである。

が、そういうこととともに、特に注意せねばならぬことは、『漱石の芸術』の著者もいっているように、この作には、作者漱石の、作品に扱われた頃の自分自身に対

する、厳しい「批評がある」点である。『道草』は大正四年の六月から九月にかけて朝日新聞に連載された小説である。そうして、明治三十年代末葉の漱石と大正四年の漱石とでは、その間に相当著しい心境の相違が生れているのである。それを一途に漱石における心境の成長とのみ断定し得るか否かは疑問としても、とにかくそれが、『道草』の作者漱石をして、『道草』の主人公健三に対する、厳しい批判者たらしめずには置かなかったのである。その批判は、漱石晩年の希求であった「則天去私」を思う気もちと、むろん直接的につながり合うものであ

った。その批判からいえば、『道草』の主人公健三もまた、その大事な人生行路において、空しい「道草」を食っているだけの人間でしかないことになるのである。だからそこに創作活動によって救われた喜びなども一応は書かれておりながら、それが決して第一義の救いとはなっていないのである。事実上では漱石にとって一応の救いであったその喜びさえもが、それに続いた行動故に、かえって苦しい反省を誘うきっかけとなっているのである。

そういう点からいえば、『道草』は決して単なる自敍

伝ではなく、むしろ一種の懺悔録だったのである。少くともそこに主として語られているものは、大正四年の作者の心境なのである。

このことが『道草』の世界を複雑にし、そこにある問題に少くとも二つの焦点を感じさせることにしている。一つはそこに描かれた当面の題材そのものの持つ意味――当年の漱石の経験した焦慮やかんしゃくの持つ意味であり、他の一つはそれを批判している後年の漱石の思想なり心境なりの問題である。その二つの焦点の間に漱石の心境の展開がたどられるのはいうまでもないが、そ

れが果して正しい意味での成長であり成熟であったか否かは、十分検討されねばならぬことになるのだと思う。

そこでまず第一の問題だが、一体何がそれほどにまで漱石を苦しめたり焦らだたせたりしたのか、それをまず主人公健三と養父島田との関係の側から見て行こう。

島田は必ずしも健三にとって優しくないばかりの養父ではなかった。時にはむしろ甘すぎる父親でさえあった。が、その甘さは純粋自然の甘さではなかった。外見上の甘さ寛大さの中に、実子でない健三の信頼と愛情とをかち得ようとする計算がかくされていた。いずれは健三に

かかろうとする投資意識がからんでいた。彼にとっては、健三の成長も未来も、健三自身のものとしてはあり得なかった。時と場合の条件如何では、「給仕にでも何でもしてしまおう」と考える――つまり親の都合のためにのみ子の存在を考える父親なのである。養い親としての恩恵、それに対する養子の側からの義理――そんなものもむろんその計算の中に入っていた。

そういう彼は、健三との縁がきれかかった時、まだ頑是ない健三に、「今後とも互に不実不人情に相成らざる様心掛度」というような、人情のからんだ一札を入れさ

せて置いて、後にはそれを種にゆすりがましい無心を吹っかけるのである。すらりとは金を出さぬものと一応判断した上で、否でも応でも出させずには置くまいとするような、そんな筋をたくんで置くのである。すべてにわたって純粋さや自然さのない、またそういうものを尊ぶことを知らない、策略と形式主義に生きる男なのである。その生活の目標はただ「金」だけであり、従ってすべてが「損得」の上にのみあった。

「ただ金銭上の慾を満たさうとして、其慾に伴はない程度の幼稚な頭脳を一杯に働かせてゐる隣れな老人」

――作者は健三にそんな観察をさせている。

こういう人間は、タイプとしてはさまで珍しいものではなく、その類型は近世戯曲などに相当多く見出されるのだが、それによっても推知される通り、これは封建的支配に毒された町人的非人間性なのである。それが町人的なものであるが故に、その根抵には人情を尊重する気もちがある。が、それが純粋さや人情のまことをそういうものとして尊重するのではなく、ただそれにからみ、それを利用しようとするだけのものになっているのである。だから利用される側からいえば人情が強みではなく

弱みになってしまう。否応なく、しぶしぶとひきずられざるを得ないのである。そしてそのひきずる過程に、歪められた合理主義――つじつまを合せた一種の理窟やいわゆる義理報恩の思想などが幾重にもからみつかされているのである。人間的な感情性の尊重や近代的な合理主義精神に一応目ざめていながら、支配される階級としての制約故に、自らそうした精神を歪めたり濁らせたりしていた町人的な生き方が、そこにあったのである。そうした生き方故に、彼等は世間的な形式や一応のつじつまさえ合わせることが出来れば、その上に安心して腰を下

ろしていられる、非良心的な存在となったのである。島田はそうした素町人的な世界でのいやな奴であったのである。

そうして、そういう彼の住んでいる世界は、当然同じような意味での町人的市井人の形づくる社会でしかなかった。健三の兄は、そういう世界のしがなさやみじめさの中に、底深く崩折れこんでしまっている。比田は、そういう世界に如才なく立廻る人間として、人に知られぬ女を囲ったり小金でも貸そうとしたりする身の安気さを、駄洒落だくさんの生活気分の明るさや、形式的な世

話事の裏面に立ちはたらく得意さの中にほのめかしながら、何でも心得たような、仔細ぶった顔つきばかりを見せたがっている。そうしてその妻は、夫との間に奥深いところでの気もちの交渉などみじんもないくせに、その夫の仔細ぶった顔つきに信頼して、彼のいくらか優しくなったのを喜んだり、一しょになって小金貸しの相手を探したりしている。そういう自分が、月々健三から幾らかづつの小遣いをもらっている矛盾などにも、一向気づかない。自律性がないから自意識も反省も全然あり得ないのである。その世界では「本を書く」のも「学問をす

る」のもただ金をもうけるだけの手段であり、遊芸と食うことのほかには生の意味も喜びも何もない。今悪口をいっていた当人と面とぶつかっても平気で空世辞がいえるし、中心のない漫談ばかりをいつまでも続けていられる。要するに低俗で不誠実で生の中心目標がないのである。「すべてが頽廃の影であり凋落の色なのだ」――健三はこの世界に対してそんな溜息をついている。

一方、そんな溜息をつく健三は、養父母の打算的な愛情からわがままに育てられたが故に、我の強い少年となった上、養家との縁がきれて生家に帰った時の実父の態

度などから、深い孤独感を――従ってひとり生きねばならぬことを、痛切に感じさせられた。その後の教養や留学が、そうした彼に、彼自身の道を強く生きることを要請したのである。近代人的な個性的な道を行こうとする自覚の誕生である。その自覚故に、彼はその個性的な道において、全自我を投げかけた仕事を持っていた。「彼は生きてゐるうちに何か為遂せる、又為遂せねばならないと考へる男であった。」その世界では、世間的な成功不成功など問うところではない。ただその仕事の成就に彼としての生の完成がかけられていたのである。それが

どういう仕事であるかは、作品の中では明瞭にされていないが、その頃の漱石が寸陰をも惜んでノートを取り続けていたのは、後の『文学論』の草稿であった。が、それはここにはさして重要な詮索にはならない。ただ健三が、そうして生命をかけた彼自身の仕事を持っていたということだけが重要なのだから。そういう意味で生命がけの、個性的な――内部的要請に従った　彼自身の仕事を持つ――生命の道を生きる、ということが、近代人的自覚の中枢をなしていたはずなのである。健三はそうした自主的な生の道を生きていたが故に、「娯楽」も「社

交」も棄てて、「守銭奴のやうに」その時間を惜しんだのである。それほどまでに自己の内部的真実に忠実であった彼が、同時に人間感情の真実を尊び、誠実さや純粋さや自然さや正直さを尊ぼうとする人であったのは、もとより当然であろう。解放された自由人のすがたと、それにふさわしい人間的情念とが、つまりそこにあったのである。

こういう健三と上記のような人々とが、「魚と獣ほどに違った」人種であることは、いうまでもあるまい。彼等からいわせれば健三は「気むづかし屋の変人」であり、

健三からいわせれば彼等の生の意味が全然わからないのである。『道草』は、まずその経の関係において、明治世相にあらわれたそのような人間生活の対比を描いたのである。それは、明治世相にのこされた町人的無自覚さと、自主的自由人らしい生き方との対比である。健三の苦悩や焦慮はまずそうした対比――或はそこから来る隔離感の上にあったのである。

しかもこの対比は、も一つ緯の関係においてくりひろげられた世界とも、一応は鋭く対照されるものになっていた。

緯の中心にいるものはすでに述べた通り健三の細君であった。彼女もまた上記のような健三の世界の異邦人である点では、経関係中の人々と少しも変らなかった。が、経関係中の人々が同じように健三を変人と見ながらも、彼の生き方やそこから生れて来る力に対しては、わからぬながら一応の敬意を示しているのに対して、彼女の場合にはそこにさえともすれば否定的な侮蔑を向けようとするものがあったのである。そうしてそれが彼女の父親に対する信頼から来ていたのである。

細君の父は官吏だった。それも内閣が変ると一しょに

身分の変動が来たり、貴族院議員の候補にあげられたり、知事に推されたのを断ったりする程度の「大物」だった。それだけ世俗的な意味での「偉い人」であり、「役に立つ男」であったのである。そういう人間らしく、彼は事務家的な「手腕」をもって人を評価する男であり、身分意識の鋭い男であった。だから乃木大将でもその「手腕」の乏しさ故に軽蔑されたし、うっかり身分の埒を越えようとした健三の卒直さ（或は無礼さ）は、わざとらしくていぬいで上品な言葉遣いでさえぎられた。そういう仕方にも示されている通り、彼はいつでも取りみださぬ「お

上品さ」を持っている。そのくせ意地の悪い小刀細工を弄したがる。お役人らしい非人情な形式主義を生きて、「証拠さへなければ文句をつけられることはないと考へる人間だ」と健三に定義される。「世間的に虚栄心」が強く、「成るべく自分を他に能く了解させようと力めるよりも、出来るだけ自分の価値を明るい光線に触(あ)てたがる」――つまり本質的であるよりも外表的に生きたい男なのである。要するに典型的な官僚気質を生きる男なのだといえよう。

こういう父を男の代表的なものと見る細君には、役に

も立たなければ手腕もなく、いつもくすぶって「蝿の頭」を並べたようなノートばかりを取り続けている上に、取りみだせば子供の大事にしている植木鉢を縁側から蹴落したりする夫が、一人前の「男らしくもない駄々っ子」か、「気ちがいじみた神経衰弱」としか見えないのである。彼女には上品にして身分ある人の娘としての誇りと自信があるのである。だから彼女はともすると健三に反抗し、これを軽蔑せずにはいられないのである。と同時に、そういう彼女は、健三の周囲の低俗な人々には、軽蔑以上の冷たい無関心さをさえ示すのである。彼女の親

戚関係と健三自身の親戚関係とは、だからほとんど相まじわることのない並行線となっているのである。その一方の線からの隔離を感じた健三は、このもう一つの線からは、同じような隔離感とともにのしかかるような圧迫感をも感じずにはいられなかったのである。憤懣やかんしゃくも生れざるを得なかったわけであろう。

こんな風に見て来ると、『道草』に描かれた対立は、支配階級的な上層官僚の世界と、その支配下にある市井人の世界と、そういう二つの世界の間にはさまれながら解放された自主的自由人らしく自分の道を生きようとす

る者との、三つどもえの対立だったということになる。それが『道草』の世界を一筋には片づけられぬ複雑なものにしているわけだし、それだけ健三の苦悶を数多いものにしているのである。「魚と獣ほどに」も違うと思う人たちのことで、その人たちを軽蔑している人間とも争わねばならぬというような、それは奇妙にこぐらかった世界であったのである。

にもかかわらず、そうした食違いを孕みながら鼎立しているもののうち、前二者は、いわばそれぞれが他の一つと裏返しの関係になっているだけのものに過ぎなかっ

た。だから一方に、「絹帽とフロックコートで勇ましく官邸の石門を出て行く」男を、「家族の外に五人の下女と二人の書生」が、「つる〳〵光って時によると健三の足を滑らせる」ほどの「玄関の床に膝」をついて、恭々しく見送るであろうような場面と、頭の上に剃刀をのせるおまじないで病気の熱がとれたような気になって、まだ無理なお勤めにとぼとぼと出かけるようなみじめな場面との対比があっても、その同じところにまた共通の要素も多く含まれていることにならざるを得ないのである。「絹帽にフロックコート」で意気揚々としていた、

「手腕」のあるはずの細君の父が、その位置を離れれば、ただそちこちと就職の斡旋を頼みまわるだけで、何一つ仕出かすことも出来ず、そのままずるずると墜ちて行ったあげくには、軽蔑する健三の古外套頂戴にも及ばねばならなくなる、そのかたちと、老朽無能の故に整理を怖れてそのための斡旋をしじゅう健三に頼んでいた兄が、葬式用の袴を彼のところに借りに来るかたちとの相似などに、そういうことの端的な表現があるのではないか、同じ世界をただ裏表の関係が異るだけで生きている人々の間には、当然その生き方や考え方にも共通したものが

多くなるのである。だから健三の島田や生家関係の人々への非難が、細君にはともすれば自分の生家関係の人々への当てこすりのように響くのである。低俗な世界でも、とにかくそこで「扱所の頭」であった「横風」な島田が、健三に対する言葉遣いにいろいろの工夫をこらしていることと、わざとものていねいな言葉遣いで健三を抑えることによって、彼の威厳と身分的優越とを押しつけようとする細君の父の工夫とが、符節を合せるような可笑しさを感じさせぬであろうか。島田が金のために陋劣で押しつけがましいとすれば、娘婿の連帯保証を求める細君

の父も、人悪く押しつけがましくないとはいえまい。彼と比田との相似点なども、数え上げたらかなり多くのものがあげられるだろう。そういう意味で、この二つの世界に住む人々は、直接的には相まじわることのない並行線を描きながら、いろいろな点で合流して、ただ一人の健三の神経を痛めつけているのである。八方ふさがりの梗塞感も生れざるを得なかったわけであろう。それは上からも来ると同時に、下からも来ていたのである。「世間全体が癪に障ってたまらない」という健三の感想が生れた所以である。

しかもこの触着は、官僚支配の当時の世相からいえば、ほとんど絶対に解消し得ない性質のものであった。何故といって、細君の父のような男が働きのある偉い人として社会の上層に位置していたら、そこに男の理想を見るのは、現実そのものに支えられた、その意味でどうにもしようのない評価になるではないか。この細君は、少くとも『道草』に描かれている限りにおいては、漱石を愛する人々がぼろくそに罵倒するような、そんなひどい女性にはなっていない。優しさもあれば細かい心遣いもあり、時には極めてすなおな態度を示してもいる。決して

悪妻とばかりはいえないのである。ただその人間評価と従ってその生き方の根本的な方針において、夫に一歩もゆずらぬものを持っているのである。しかもそれが上記の通り現実そのものによって支えられているのである。だからそれは、そうしたものを通念化している現実そのものの誤謬からなっとくさせるのでなければ、どうすることも出来ぬものになるのである。そうしてそれが健三には出来ないのであり、またしようともしなかったのである。「二人は互に徹底するまで話し合ふことの出来ない男女のやうな気がした」と健三も述懐しているが、正

にその述懐通りの二人だったのである。だから二人はいくら争ったところで、「現在の自分を改める必要を感じ得なかった」のである。健三がそういう細君に「しぶとさ」を感ずれば、細君の方では健三に反社会的な「変人」を感ずるほか仕方がなかったのである。それは細君だけが悪かったのではなく、細君的な思惟や評価を通念的なものとしていた時代或は社会の、悲劇的な齟齬であったのである。だから苦しんだのは健三ばかりでなく、ヒステリイに陥った細君も時には剃刀などまで持ち出すようなことになっている。

といっても、そういう通念的な評価をくつがえすことが、絶対に不可能なのでないことは、「手腕」のある「偉い男」が、彼の属する機構から離れてしまえば、何一つ役に立つ事も出来ず、ただ就職運動と借金のための苦労とをくりかえす間に、公金費消から軽蔑する男の古外套頂戴とずるずると滑りおちて行くだけの、しっこしのない無能極まる男でしかないことを指摘するだけでも、考え得るはずなのである。つまり、機構だけが巾をきかせている世界では、人間はそのように下らぬものになってしまうのであり、従ってそんな世界にだけ通用する人間

の評価が、結局無意味なものでしかないことは、『道草』に描かれている範囲からだけでも明瞭なことなのである。が、社会機構というものの意味を考えることが出来ず、その機構から滑りおちた人間の沈倫をもただ「運が悪い」というだけの神秘主義的解釈で片づけていた『道草』の世界では、それが結局どうしようもないものとならざるを得なかったのである。周囲の人々と自分との考えや生き方の相違を、健三はただ「教育が違うんだから」とだけで片づけていたが、その教育や学問が、まだそういうことを根本的に考えるところまでは行っていなかっ

たのである。

これはむろん一例だが、その一例だけでも十分なように、健三とその周囲との対立は、当時の社会にあっては、こうして結局どうすることも出来ないものであった。父や兄にも異邦人を見、細君とも理解し合えず、ましてその他の親戚や細君背後の人々などとは折合えようのなかった健三の、孤独地獄の淋しさと憤りにみちた焦らだたしさとが、そう思えば必然的な迫力をもって感じられることになろう。そういう人の苦悩を書き、一歩進めて闘いのすがたを描いたものと見れば、当時の作品としての

『道草』の進歩性が強く感じられることになろう。少くとも、そうした時代の悲劇性の底を探って、そうした悲劇の根本的な由来を髣髴させるところまで、問題を押しつめて見せているところに、まず『道草』の到り得たリアリズムの深さが感じられるのである。殊にそれが、いわゆる問題文学的な一面性にかたよらず、「絹帽にフロックコート」の上層官僚にも、借り着の袴の下級局員にも、相似た社会条件からの制約が認められる趣などを、十分正しく捉え得ている、その写実の全円性が、高く評価されねばなるまいと思う。そういう全円的なリアリズ

ムが、官僚機構の中に反りかえっていたはずの細君の父親なども、一皮剥けばやはり根のない不安さを生きる人間の一人でしかないことを、正しく見抜いていたのである。「貴族院議員」であるかないかによって「市長」になれたりなれなかったりするばかりか、「相場」に手を出しても必ずもうけられる身分とそうでない身分とがある、そんな社会に生きて、誰が不安なしにいられよう。そういう不安な人生の遭逢を、「運」だと片づけてあきらめるか、でなければ比田のように、無神経な身勝手さと要領よさとをもって、駄洒落まじりにでも暮している

以外には、伸び伸びした生の明るい喜びなど、とうていあり得なかった明治世相であったのである。『道草』は、そういう明治世相の暗さと、それ故の人間のあり方の歪みとを、当時のリアリズムの行き得た限り、つきつめて見せた作品であったともいえるのである。その低俗な世界への鋭い観察などにはどこか正宗白鳥を髣髴させるものがあることや、徳田秋聲が漱石作中ではこの作を特に高く評価していたことなどをも、ついでに書きそえて置こう。明治の写実主義文学として、これは確にその絶頂を画出したものの一つであったのである。官僚支配の明

治社会が、武家支配の近世社会と、実質的にはそれほど違わぬものであったことや、それ故の主我的自由人の苦悩を、これほどはっきり描き出して見せた作品は、少くともそうたくさんはなかったのである。

と同時に、この作が、上記のような主人公の闘いの場を、夫婦とか親戚関係とかいうものの中に求めている上に、その親類縁者が物質的にはよってたかってそれほどに対立しているこの主人公を頼りにしているのであるだけに、この作のリアリズムは、これは明治文学におけるかなり際立った共通題目であった「家」の問題について

も、示唆するところの多いものになっている。作品にははっきり書かれていないが、とにかく「扱所の頭」になるほどの人を世話したほどの、身分というか家柄というか、とにかくそういう家の中から出て来た健三の兄が、遊芸と食うことのほかには何も考えなかったその育ち方や教養の故に、新しい時代気運の中でひたすら没落的な生を生きねばならなかったことにも、明治時代らしい旧家の運命を思わせるものはあろうし、新しい教養をもってはそういう運命を破って出ようとした主我的自由主義者健三の味わわねばならなかった梗塞的な生の苦しさ

と、それが背中合せの二筋道であったことなどにも、深い感慨を唆るものがあるのではないか。洋行から帰って大学と高等学校とに教鞭をとるほどの人の生活が、不如意な故にその細君がひそかに着物を質に入れねばならないようなものであったとか、それほどの手許なのに親類縁者には頼りにされて、そのため余計に人生を煩わしく生きねばならなかったとかいうことの中にも、考えさせられる問題は含まれていよう。洋行帰りの大学教授の細君が、大きな包みをかかえてこっそりと質屋に出かける、教授その人は三流政治家のよく拭きこまれた玄関で滑っ

てころがるなどという場面を想像したら、そこに痛烈な諷刺が感じられるのではないか。それが『学問のすゝめ』（福澤諭吉著）をベストセラァズの最初のものとした明治という時代の、三十年代末葉の社会風景だったのである。健三が「社交」も「娯楽」もすてていたことの理由を、前には彼が生命がけの仕事を持っていたからだとだけ書いたが、そんな理由などなくても「社交」にも「娯楽」にも縁遠い健三であったことが思われるのではないか。しかもその健三をさえ羨やみ頼る人々の群がひしめいていたのである。そんなことを考えると、中心的な題目であ

る思想の対立とか、そこから来た人々の生き方や生活感情の齟齬とか懸隔とかいうもののほかにも、示唆するものの多い『道草』の世界であったことが思われると同時に、その各部分の記述に作者の意識した以上のニュアンスと有機的連関との見出される、それだけ緊密な構成を持った『道草』の世界だということも考えられるのではないかと思う。

が、そこにどれほど多くの見どころが見出されても、すでに述べた通り、『道草』の作者は、そういうところにその作品の主要なねらいを置いたのではなかった。健

三とその周囲とを上記ほどにも鋭く対立させていながら、作者はそうした対立をただ対立としてのみ描き上げようとしたのではなく、ましてその対立を見究めてその由来をつきつめようとしたのでもなかった。だからその点への説明は、ただ「教育が違うから」というだけで、作者は極めてかんたんに片づけている。作者は、少くとも一応の意識としては、かえってそうして対立する者どうしの間にある相似を、きびしく捉えようとしているのである。だから健三は、上記ほどにも一人ぼっちの世界の淋しさ息苦しさに焦らだっていながら、その細君ばか

りか島田との線上にあらわれる低俗な人々とさえ、結局相似た人間でしかないことをくりかえし指摘されているのである。

まず彼とその兄との場合を見たまえ。

贋首の不安を「何度となく繰り返しながら、昔から今日まで同じ職務に従事して、動きもしなければ発展もしなかった」兄は、何かしら「為遂せよう」として情熱的に生きている健三から、「二十四五年もあんなことをしてゐる間に何か出来さうなものだ」と呆れられる人間である。とうてい「道伴」にはなり得ぬ人だと思いすてら

れてもいる。にもかかわらず健三は、島田との事から追憶や過去との交渉に生きねばならなくなった自分を、「いつの間にか兄と同じ過去の人になった」と考えている。袴を借りに来た兄の噂をしながら、自分もいつ同じような境涯に陥るかも知れないと怯えてもいる。そうしてそのあげくには、「兄弟だから他から見たら何処か兄と似ているのかも知れない」とまで考えるのである。しかも事実は正にその通りなので、兄が、何か面倒なことの起った場合、「決して自分が懸合事などに出かける人ではなかった。少し気を遣はなければならない面倒が起ると、

必ず顔を背けた。さうして事情の許す限り凝と辛抱して独り苦しんで」いるというような、そんな人間であるのと同様に、「不合理な事の嫌いな」健三自身も、そういうことの起った場合、「心の中でそれを苦に病み」ながら、「別に何うする料簡も出さなかった。彼の性質はむきでもあり一図でもあったと共に、頗る消極的な傾向を帯びてゐた。『己にそんな義務はない』自分に訊いて自分に答を得た彼は、其答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥する決心をした」と書かれるような、そんな男でしかないのである。そこに、圧力

と梗塞との故に自我の生ききれないことをあきらめた男二人の、重ね写真が見出されるではないか。「彼（兄）の半生は、恰も変化を許さない器械の様なもので、次第に消耗して行くより外には何の事実も認められなかった」と考える健三の思考は、「いくら速力を増しても尽きる期のない半紙の束――鉛筆で汚された紙」の束の、ところどころに赤いしるしをつけながら、社交も娯楽も暮も正月もなく、半ば機械的にそれを一組一組開き続けて行く自分自身のすがたの上にも、そのままかえらなかったとはいえまい。「過去の人」である兄と、「未来の

希望を多く持ち過ぎ」ているはずの健三とが、こうして決して無縁の人ではないことが、『道草』の中にはかなり度々くりかえされているのである。

そういう点は、健三の片意地と姉お夏の強情とを比較したくだりなどになると、一層明瞭であろう。「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥げば己だって大した変りはないんだ。」健三にそんな反省を持たせた作者は、ともすればぎょうさんな表情などを示したがるこの姉との相似を、比較的容易に「実に」とか「一番」とか「大」とかいう種類の、最大級の強調的表現を用いたがる健三

の上にも、やはり見出しているのである。そうして、そんな風に見れば、彼は比田とも島田とさえ、決して異邦人でばかりはないのである。比田が彼の細君に心の深い消息を何も知らせぬ男であるように、健三もその細君に自分の気もちを話そうとしなかったり、話す必要がないと考えたりすることの多い男だった。比田の夫婦関係が中途半端なよいかげんのものであるように、健三の夫婦関係も片づかぬ中途半端さの上にあった。比田が妻の病気に冷淡であるように、健三もまたその報をきいて「又かい」だけですませてしまうこともあるのであった。そ

ういう彼は、兄の病気の話をきいた時には、いきなりその死後に起るであろう経済的負担のことを考えている。何もかも金に結びつけて考える島田との相似が、そこにほのめかされているのではないか。まごころも何もこもらぬ金を島田の先妻お常に与えることによって、眼前の面倒さや辛気臭さから逃れようとするのは、理不尽な金を要求する島田の世界と、それこそ表裏のものであろう。島田が後妻のつれ子お縫の死を機会として、健三からなにがしかの金を引出そうとする時には、健三はもう一歩を進めて、島田その人の死を思う人間であった。そうい

う相似を思うが故に、この「凡てが頽廃の影であり凋落の色である」世界を思う健三の心は、そういうものと「血と肉と歴史とで組びつけられた自分をも併せて考へ」て、重苦しく「沈んだ」心にならずにはいなかったのである。

「家」というものの関係から、健三が周囲の人々にいろいろの負担をかけさせられているとすれば、細君をその生家に托した健三自身も、「父母が付いてゐるぢやないか」というような、細君の生家に頼る気もちを露骨に示しているのであるし、彼自身の細君の父に対する非難は、ほとんどそのままのかたちで細君から彼に向って投げか

えされてもいるのである。健三といえども、こうしてつまりはその周囲の人々と同じ世界に住む、「魚」であり「獣」であることに変りはなかったのである。

そういう健三が、その細君とも、単なる対立者でばかりあったのでないことも、もういうまでもあるまい。

筋道の通った頭を有ってゐない彼女には存外新しい点があった。彼女は形式的な昔風の倫理観に囚はれる程厳重な家庭に人とならなかった。政治家を以て任じてゐた彼女の父は教育に関しては殆ど無定見であった。母は又

普通の女の様に八釜しく子供を育て上げる性質ではなかった。彼女は宅にゐて比較的自由な空気を呼吸した。さうして学校は小学校を卒業した丈であった。彼女は考へなかったけれども考へた結果を野性的に能く感じた。

「単に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふだけの意味で、其の人を尊敬しなくてはならないと強ひられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の実質を有った人間になって、自分の前に出て来るが好い。夫といふ肩書などは無くっても構はないから」

不思議にも学問をした健三の方に此の点に於て却って

旧式であった。自分は自分の為に生きて行かなければならないといふ主義を実現したがりながら、夫の為にのみ存在する妻を最初から仮定して憚らなかった。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根は此処にあった。夫と独立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。動もすると「女の癖に」といふ気になった。それが一段劇しくなると忽ち「何を生意気な」といふ言葉に変化した。細君の肚には「いくら女だって」といふ挨拶が何時でも貯へてあった。

「いくら女だって、そう踏み付にされて堪るものか」

健三は時として細君の顔に出る是丈の表情を明かに読んだ。

「女だから馬鹿にするのではない、馬鹿だから馬鹿にするのだ。尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵へるがいい」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向って投げる論理と同じものになってしまった。

彼等は斯くして円い輪の上をぐるぐる廻って歩いた。

一面かなり積極的である細君が、健三との交渉の或る面で示す消極性、「女との交渉には羞恥に似たやうな一種妙な情緒」のため固くなって、「却って女から弾き飛ば」されてしまう健三と、夫を打解けさせる「手腕のない」細君、いくら視力の濫費を戒められても改めようともしない細君と、そういう注意をしながら自分の視力の虐待には一向介意しない健三、というような、そういう二人の相似のことも幾度かくりかえされているばかりか、「斯くして夫婦の態度は悪い所で一致した」と、作者によってはっきりと断定されてもいるのである。『道

草』が、健三と周囲の人々との対立を描く以上に――或はそれほどの対立を孕みながらに、より根本的なところでは「悪い一致」を含んでいるのであることを書こうとした作品であることが、こうたどって来れば恐らく誰にも明瞭であろう。『道草』は決して対立そのものに問題を見出そうとした作品ではなかったのである。

が、それより、こうして対立する人々のどちらにも認められる共通性は、その直接的な由来においてはむろんさまざまであった。同じような経済的窘窮に由来するものもあった。開放的に生き得ない男女関係のぎごちなさ

から来たもののもあった。もっとはっきり封建的なものの残映である場合もあった。より根本的に融和し得ないイディオロギィの対立から来たもののもあった。その他なお等、等、だが、それを総括してみれば、その大部分が、同じ社会的条件を生きる者にとって、ほとんど不可避的な、その意味では業のようなものだともいえる、時代的制約のかげなのである。漱石は、むろんそれを意識してのことではなかったけれども、きびしく対立する者のどちらにも、同じ時代的な制約のかげろっているかたちを、こうしてこの『道草』において、極めて端的に描破した

ことになるのである。すでに触れて来た、支配する官僚にも支配される市井人にも、共通した性向や欠陥があるのを鋭く見ぬいていたというのも、むろん同じ意味合いのものだが、ここまで来たら、『道草』のリアリズムの卓越が、いよいよはっきりと感じられるわけであろう。昭和幾年頃のことであったか、プロレタリア文学の陣営から、弁証法的リアリズムというものが要求された。それを三木清が綜合的リアリズムと飜訳していたが、その訳語が端的に示しているように、それは明かにこうしたリアリズムの全円性を求めたものであったと思われる。

対立する一方の側にのみ問題があるのではなく、他の側にもまた同じ問題がある、だからこそその問題が、そこに害毒性のあるものなら、全円的根本的に検討されねばならぬことになるのであろう。官僚支配が人間を毒するものなら、その支配内に生きる進歩的自由主義者も、またその害毒から無縁ではあり得ないのである。老朽万年局員の兄を、自分の力など全然信じ得ない、消極的に打ちのめされきった男にしている世界では、その消極性に一面では腹を立てる自力的自由主義者をも、その自主的な自力主義に徹底するかわりに、「已にそんな義務はな

い」などという、他を顧るような責任のがれの弁解を考えての、消極的で不誠実な引っこみ思案に、ともすれば落着かせてしまうのである。そうしてそれは、それと対立する側の者にとっても同じことで、その立場をいくら主張したところで、容れられるどころか、理解してももらえまいと思えば、如何に「しぶとく」「積極的」な細君でも、その点での夫との交渉には、消極的にならざるを得ないのである。そうしてまたそうした二人の関係にもあらわれているように、どちらの思想にも支配的な強力さの期待されぬほど、それが無力なものでしかない場

合、政治家や一般民衆が、学問も思想的立場もない、ただ一応のつじつまを合せるだけの形式や事務家的な手腕に、意義や誇りを見出して行くことになるのも、極めてあり得べき必然ではないか。といってはいい方が逆かも知れない。そういう政治であるが故にそういう現象が必至となるのであり、従ってそこに重大な問題のあり場所を見出すべきだというのが、むろん正しいいい方であろう。が、それはいずれにしても、現象相互間にあるそういう関係が明瞭になった時、例えば兄を圧しつけている問題の根本的な解決が、その兄の生き方を一面唾棄せず

にはいられない弟にとっても、直接自分の苦悶をこめた問題になり得るのだ。その時その弟にとってその兄の問題を取上げた「文学」があり得るのだ。漱石はそこまで行っていたからこそ、兄や比田を、ないしはこれほどにまで対立していた細君をさえ、あれまでに造型出来たのだと思う。共通的な暗いかげを絞り出して、それに根抵するものを探り尽そうとしたこのリアリズムの全円性ないし綜合性は、文学を単なる傾向性や観念性から救うためには、絶対に必要なものなのでなければならない。『道草』のリアリズムがそういうものであったが故に、それ

は、明治半封建制下のさまざまな人間の生態を、極めて有機的な連関性をもって描き尽して、結局悪いのは人間じゃないと、考えさせ得る作品ともなっているのである。素晴らしいものだと思う。

が、ここまでその仕事を正しく推し進めて来た漱石は、その最後の一点において、上記とは正反対の解釈をひき出したのである。彼はそうした相似の奥に――或はそうした相似を持ちながらしかもきびしく対立せずにはいないことの中に、今までに用いて来た言葉でいえば人間の「業」を認めたのである。彼自身の言葉でいえば「我執」

である。そこにはむろん「悪」の意識が――或はもっと端的にいって「罪」の意識が、からんでいた。人間が悪いのじゃないと考え得るところまで問題を押しつめながら、漱石はこうしてかえってそこに人間の「罪悪」を見たのである。そうしてこの発見が漱石に沈痛な昂奮を与えたのである。すべてが「頽廃の影であり凋落の色である」周囲と、「血と肉と歴史」とによってつながれていることを感じた健三が、「沈んだ心」になりながら、「気は興奮してゐた」と説明されているところなどに、その間の消息がうかがわれよう。その昂奮が、いわば『道草』

の基調となっているのである。作者はその昂奮から、人間各個の相似を思うところから更に一歩を進めて、そういう人間の奥にある「我執」――即ち「罪」の追求に、その情熱を傾けることになったのである。だからそこでは、同じような業苦を生きる人間の中でも、周囲の誰とも融和することの出来ない健三こそが、最も我執的な、最も罪深い人間として描き出されねばならぬことになった。思いがけず原稿料を手に入れた彼が、他の何事をも思わずに自分勝手な買物をしたあたりの記述を見給え。彼はそこで彼自身とその姉とを比較して、この姉をさえ

彼以上の人間と考えているではないか。

そういう考え方に陥った作者は、それは健三の自然でない、歪められた生立ちから来た人間的な汚濁だと判断したのである。不幸な生立ち、殊に養家での汚い生活の感化から、「気質も損はれ、順良な天性」も失わされてしまったが故の人間的な歪み！　そう考えた作者は、そこから出発して、健三におけるそうした歪みの追求に全力的であろうとしたのである。そうしてそれがつまりは『道草』の根本的な意図であったが故に、それはそのそもそもの冒頭から、洋行帰りの主人公の反省の足りなさ

を鋭く指摘するような書出し方がされたのであるし、そしてその反省が進むにつれて、彼はその姉との比較においてばかりではない、その細君との対比においても、上掲引用文が明示している通り、より横暴で我執的であるかに描かれるようになったのである。それどころではない。彼は彼の一番軽蔑していた島田の先妻お常にさえ、ひけ目を感ずるようになっている。そうしてとどのつまりは、わずかの負担やわずらわしさを苦にするあまり、目の前にいる島田の死を思うところまで堕ちるのである。そこまで行ったら、それはもう性格的な歪みどころ

の生まぬるいものではなく、冷酷無残な罪人の意識であろう。健三をそこまで堕とした作者が、そうした罪の根源である我執を断滅する以外に彼への救いがないことを思う人であっても、もとより不思議はないわけであろう。はじめにも書いた、いわゆる「則天去私」の境地を思う作者の気もちが、『道草』全体の背後に、こうして色濃く揺曳することになったのである。鬱屈時代の作者自身を厳しく批評しようとする大正四年の作者がここにあったわけだし、この書が厳しい懺悔録となった所以もまたそこにあったのであった。それも単なる懺悔録という以

上に、かって武者小路實篤が、『それから』を評していった、「運河」という言葉をそのままに、如何にも理づめの展開と段取りとを踏んだ、小説的（構成的）懺悔録なのであることも、上記でおおよそには髣髴させ得ているのではないかと思う。だからそこに「則天去私」の境地を思う作者の気もちは感じられても――或はそうなる気もちの必然は理解されても、その境地そのものからにじみ出て来るような味いは、まだ味えないのである。それを味わわせるには、あまりに厳しい作者の吟味意識、があり過ぎるし、吟味の結果を効果的にあんばいしよう

とする作者の私（構成意識）があり過ぎるのである。その意味ではこれは秋聲のリアリズムとは大分異った、やはり夏目漱石の作品なのである。

が、それはむろんこの作の欠陥にはならない。それどころか、そのきびしい吟味の故に、主我的自由主義者健三のうちにある残存封建性や、そういうものを残さねばならぬほどの梗塞の中に生きるが故の、自主的自由人としての生活態度の不徹底さ、例えば「己にそんな義務はない」などと自主的自由人らしくもない責任転嫁を考えて、そういう弁解の上に安易に腰を下ろしている狡い怯

惰さや、「彼の道徳は何時でも自己に始まり自己に終るきりだった」というような、きり離されただけの個人意識の問題などが、あますところなくえぐり出されることになって、それが今日の人間のあり方にも、極めて示唆多い反省を与えるものとなっているのである。すでにあげて来た「家」の問題や、町人的市井人のあり方の問題などとも合せて、封建時代的なものの残滓と近代的なものとの対決に、あくまでも鋭く切りこんだこの作は、その近代的なものの未成熟さについても、こうして極めて厳しい批判の眼を向けたものとなったのである。前者に

おいても明治文学史上稀に見る作品であったこの書は、主我的自由主義者がそれほど厳しい自己吟味に沈潜した懺悔の書としても、また極めて高く評価されねばならぬものとなっているのである。

のみならず、そういう悲痛な懺悔と背中合せのものである「則天去私」の境地が、境地として深いものであることも、もとより否定出来ない。強く自我の道を生きようとしていた健三が、そういう自我断滅の境地に入るためには、自己克服の大試練がいるだろう。『道草』にその境地からにじみ出して来る味いはなくても、とにかく

その境地の深さをのぞいて、そこへの参入を志向した漱石の心境の展開にも、むろん一応の敬意は払われねばならない。

けれども、「彼の道徳は何時でも自己に始まり自己に終るきりだった」と反省した健三が、そういう彼自身をそこに結びつけねばならぬより大きなものとして、いきなり「天」を考えたのは、彼の細君がその父の沈淪をただ「運が悪い」とだけ判断したのと、同じ種類の神秘主義的逸脱ではないか。健三の苦悩を、「血と肉と歴史」とに所縁するものとし、主としては歪められた生立ちの

故に帰しているのは、その頃までの支配的潮流であった自然主義の見方に似たものとして、一面的ながらまだしもその妥当さが認められるとしても、この神秘主義的逸脱には、あまりにも倒錯的な思考の数々が踏まえられている。第一それは、人間が悪いのじゃないと考えてよいところで、かえって人間が罪悪的なものなのだとする、逆の判断に陥ったところから出発している。だから恐らくこの作中では最も正しく、最も人間的に生きていたのであるはずの健三を、実は最も罪深い人間なのだと規定するような、倒錯的な観察にも連ならざるを得なくなっ

たのである。彼が周囲の人々よりも一見より我執的であったのは、実際はそういう比較の問題でなく、自我の道を正しく自主的に生きようとするものと、はじめから自我も自主性も何もない人間との対比であったのである。健三が我執の塊りなるが故に周囲の誰よりも苦しまねばならなかったのではなく、梗塞された社会事情の中で、それとも知らず誠実一途に自己の道を生きようとしたが故に、触着と息苦しさとを感じずにはいられなかったのであることは、今更ここにくりかえすまでもないことではないか。周囲の人々との相似点において、ともすれば

彼の方に度強いものがあったというのも、そうして周囲にさからってまでも自分の道を通そうとしたほどの強さはげしさが、そういう面にもおのずからあらわれずにはいなかったのであるし、対立のはげしさがそれを必至の現象としたともいえるのである。その意味でいえば、それは、根本的中枢的なものから派生して来た、末梢的なものでしかなかったのである。その根本的中枢的なものを重視するかわりに、かえってその末梢的なものを重視してしまったところに、いってみればこの卓越した『道草』のリアリズムにも、悲しい限界があったことを示す

ことになるので、それ故にこそ『道草』は、もう一歩でそこに迫り得るところまで行っていた問題の根本的な解明に到り得ず、かえって否定すべからざるものを否定せねばならぬような、倒錯的な結論に落着かねばならぬようなことにもなってしまったのである。それがこの卓越した『道草』の世界に、すっきりしない一抹の不透明さを孕ませることにしたのは、争えぬ事実であろうと思う。作者の思考に客観的妥当さに到り得ない誤謬があり、従ってリアリティを感じさせ得ないものがあったのである。健三をお夏やお常よりも低いものと規定しようとす

るあたりの記述などに、どうして人をすなおにひき入れる力があり得よう。

同じような倒錯と不透明さは、この作中に示された学問とか教育とかいうものに対する作者の判断にも、また認められる。健三を否定的に見ようとした作者は、健三の生き方を支えているものと考えた教育とか学問とかいうものをも、同時に否定しようとしたのである。健三と周囲の人々との考え方や生き方の相違を、「教育が違ふから」と考えていた作者が、後には、「教育の皮を剥げば己だって（姉と）大した変りはないんだ」と考えて、

その変りのない部分を変っている部分よりも重視しようとする人であったことは、上記範囲で明瞭であろう。そこまで行く間に、彼は健三に彼に接近する学生に対して、学校や図書館を牢獄と見、その牢獄の中で養われた方針によって進むことは、「徒らに老ゆるだけのこと」だというようなことをいわせて、彼等をびっくりさせているのである。それはむろん、教育そのもの学問そのものがそのように否定されねばならぬものだということを、正しく道破したものではなく、強いていっても、そのような考え方をしか持たせ得なかった教育や学問に、吟味さ

るべきものがあったのだということを、示唆するだけのものであろう。注1 少なくともそれが、強調に過ぎた嘘を孕んでいることは、誰にも明瞭なところであろう。健三がそういう考え方に陥ったということの中には、政治家が学問を尊重せず、教育に無定見であったという時代気運と、直接つながるものがあることも、わかりやすいところであろう。そういう時代が健三の学者としての誇りをうばったのであり、誇りをうばわれた健三は、その教育観や学問観において、軽蔑する三流政治家と同じものを持つ人になってしまったのである。そういう現象を

捉えたのは手腕でも、そういう現象の意味を正しく理解し得なかった倒錯的な判断は、やはり『道草』の世界に或る不透明なかげを投ぜずにはいなかったのである。

同じようなことが、その生命とほとんどすべての時をかけて悔いない仕事に没頭することをさえ、健三自身に、「索寞たる曠野の方角へ向けて」歩いて行くこと、「温い人間の血を枯らしに行く」仕事なのだと、反省させているところなどにも感じられよう。尤も、この場合には、さすがに上記の学問や教育などの場合のように、全面的な否定に傾き尽したのではなく、棄てきれぬ執着

をそうした仕事に残していた漱石であったらしい趣を示した部分も他に見出されて、それがこの『道草』に一切無我の「則天去私」の境地に参入し得たものであるらしい味いを持たせ得なかった、一つの理由でもあったろうかと思わせるのだが、しかし健三的な生き方を否定し、学問や教育をも否定的に見ている作者とすれば、その熱中している学問的な仕事に対してもまた否定的であろうとするのが恐らく必然であろうと思う。だからそこには、さすがになお若干の執着を残しながら、ともすれば否定観に傾こうとしているような、そんな作者の心境的動揺

が示されているのだというのが、最も正しい解釈になるのだと思う。学問や教育を否定的に見た漱石は、こうして健三が身をもって示していた、個性的な道を生きようとする近代人的な生き方をも、ともすれば否定しようとするような気もちにさえ、傾いていたことになるのである。

それればかりではなかった。そういうところまで来た時、漱石――ないし健三の前には、単なる健三的な生き方への否定があったばかりでなく、人間的な営みの一さいを否定しようとする気もちさえ、ともすれば去来しようと

していたのである。教育を否定し学問を否定した彼は、そのかわりに「野生」を多く口にしはじめた。そういう彼は、人間の営む正月をも否定して、人間的営為の「小刀細工」のない自然の中に、逃れて行かずにはいられなかったのである。そうしてその自然を楽しめない自分を悲しまずにはいられなかったのである。健三を否定するところから健三的な生き方の否定に進んだ作者の気もちは、こうして更に一さいの人間的な営みを否定しようとするところまで、傾いていたのである。それはもう単なる我執の否定ではなく、人間そのもの――少くとも人間

的な創造意欲や創造力のすべてを、否定しようとするものであったことになろう。そうした否定のさきに、無為為楽の「則天去私」の境地がひらけるのであり、そこに行くための心境鍛錬と脱却の工夫とが必要になるのである。それが如何に多くの倒錯的判断の上に意図される境地であるかが、考えられるのではないかと思う。それは、そうして数多くの倒錯的判断の上にあるものであるが故に、そのそもそもの根柢にあった対立の問題を、客観的妥当さをもって処理することが出来ず、これを天とか罪とかいう種類の神秘的宗教的な場所に移して、人間否定

のための心境鍛錬をいうようなところに、落ちこんだものとならざるを得なかったのである。神秘主義的逸脱という所以だが、そうした逸脱を必至としたことの根本は、自我の道を生きるという近代人的自覚を、いきなり全部的に我執と混同してしまったところにあったのであった。そのようにして正しい自覚であり得るものまですべて妄執的なものと判断してしまったところに、漱石におけるそうした自覚の限界性――或はおぼめかしさもあったわけであろうし、そうした自覚を正しくそれとは理解し得なかった当時の世俗一般の伝習的中世的な判断が、

そこに割りこんで来たのだともいえよう。とにかくそういう判断の誤謬故に、そういう世俗的通念を破って出ようとした健三的生き方の意義も価値も、この作全体の印象としては、十分効果的に表現されているとはいえないのである。それを作者が意図したのでない以上、それは止むを得ぬ結果であったに相違ないが、健三的な生き方に一応の意義を認め、従って彼と周囲との対立に重大な問題を認める立場からいえば、せっかくの題材を取上げたこの作が、この最後の一点において、それを十分生かしきれなかったことを、残念に思わざるを得ないのであ

る。

なお、「則天去私」の境地への思慕が、上記のような世俗的判断とも連なるものであっただけに、それはその根抵において、ただ支配される庶民として「あなたまかせ」の平安さに生きるだけの、市井人的態度――当時はやった言葉でいえば凡人主義とも、必然的に隣り合せたものになっていたことを、一言書きそえて置きたい。周囲の人々に対立し通した健三を、作者の筆は、「他と反(そり)が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた彼は気の毒なものであった」と説明している。周囲と「反が合

はぬ」健三が「気の毒なもの」なら、反が合せられるようになれば当然しあわせであり得るわけだろうし、作者が健三にそういう生き方を望んでいたのであることも、いうまでもあるまい。そういう気もちに傾かされた健三が、上記の正月にそむいて自然に逃れた場合とは反対に、ほとんど無心に、しかしながら楽しげにそれぞれの年末の営みにいそしんでいる市井の人々と、彼自身とを対比して、そこから来た反省らしいものを持ちながら、静かに自分の日常生活に帰って行くかたちを、写し出されているところもあった。そこに「則天去私」の境地そのも

のの割切れぬ不透明さもあるわけだが、それはとにかく、そういうところを見ると、「則天去私」を思う気もちが、自然主義末期に強力化した凡人礼讃のそれと、その根抵において手をつなぎ合ったものであったことが、端的に知られるのである。一さしの批判と闘いと積極的な創造意欲との放棄が、だから両者の共通的な性格となっているし、「則天去私」という言葉の中には「あなたまかせ」という響がおのずからこもっていることになるのである。対立と闘いとに出発した健三が、そうした境地の前に頭を下げたというのは、自我（人間）の確立から解放

への道を行こうとしたものが、そうした生の苦しさ故に、今更中世的な隷属への復帰を願望するに到ったようなものである。健三の生き方や闘いに意味があると見て来たのが誤りでないとすれば、この結論にはもとより同感などあり得るはずがないのである。それは凡人主義に傾いたのが自然主義の敗北でしかなかったのと、完全に同軌の現象であったのである。ここまで来た漱石の心境の展開を、その徹底性に一応の敬意を感じながらも、単純に正しい成熟とのみ考えるのは疑問だとして来た所以なのである。

が、『道草』に取扱われたような問題に当面して、それの客観的に妥当な解決を求め得ぬままに、そこから来る苦悩の克服を求めて、心境鍛錬の宗教的態度に救いを求める一方、苦悩を不可避の宿命とあきらめて無抵抗の凡人主義に傾いたのは、単に漱石一人の道であったばかりでなく、明治文学一般の結論だった。それはつまりはこの時代としての問題探求力の限界であったことになるのである。とすれば、問題のあり方をそのぎりぎりのところまで追いつめた上、その半ば不可避的だった結論に落ちこんで行かざるを得なかった過程や、その過程に含

まれていた思考の誤謬を、上記ほどにもはっきりたどらせる『道草』は、やはりすぐれた作品だったということが出来るのではないか。そのリアリズムは、そういう問題の上にそういう誤謬の重なり合っていた、それ故宗教的な逸脱か凡人的なあきらめにでも行くよりほか救いのありようのなかった、明治世相の不透明な暗さを、それこそリアルに伝えているのである。その意味では、これは動かしがたい真実性につらぬかれた作品だったということになるのである。

以上のような作品であった『道草』とその次の作品『明

暗』とをもって、その最後の幕を閉じられた漱石の作家としての生涯は、今までに述べて来たところで明瞭なように、明治三十年代末葉彼が八方ふさがりの梗塞にのたうちまわっていた、その苦悩のさ中からはじまったのであった。その頃の彼は、そういう苦悩のせめてものはけ口を求めるように、問題の多い世の中とその底にうごめく自分自身のすがたとを、一とからげにして笑いとばそうとするような作品に筆をつける一方、せめてそうした暗い人生を忘れるために、楽しく美しい夢の世界を描き出そうとするような作品に多く傾いていた。『猫』とか、

『幻影の盾』とか『薤露行』とかいう作品が、そのころの彼のそういう二つの面をそれぞれに代表するものであった。それらの作品は、相前後して発表された島崎藤村の『破戒』などとともに、新しい浪漫主義の擡頭を約束するものであるかに受取られたりして、読書界一般から非常に期待をかけられた。それが『道草』に描かれた苦悩から彼を一応救ったことは、すでに述べた通りである。

が、周知の通り、文壇の大勢はそのころから急速に自然主義一色に塗りつぶされはじめた。上記のような出発を示した漱石は、そういう大勢に一応反撥して、『坊つ

ちやん』や『草枕』のような作品を発表し、その後者と高濱虚子の『雞頭』に序した文章などのために、「非人情」ないし「余裕派」の作家と称ばれた。苦渋な人生にあきあきしていた漱石は、苦渋な人生をそのままに再現しようとしているかに見えた自然主義に、かんたんには左袒し得なかったのである。彼は苦渋な人生から一歩離れ、これを鑑賞的低徊的に眺めることによって、せめてその味いを楽しもうとしたのである。だからその態度は、「非人情」とか「余裕派」とか称ばれたほかに「低徊趣味」とも規定された。作家として出発した以前の俳諧的

教養がそこに影さしており、いわゆる写生文から系統をひくものがそこにあったのである。

けれども、自然主義が決して単に苦渋をそのままに再現しようとしただけのものでなく、より根本的には新しい人間主義樹立のための闘いを意図したものであったのと同じように、この一応は自然主義に反撥した作家も、やはり同じ時代の子らしく、同じ人間解放のための闘いの場に、間もなく正面きって乗出さずにはいられなくなった。『野分』とか『虞美人草』とかいう作品がそういう作者によって作られた。しかもそれらの作品は、多く

の自然主義作品とは違って、主我的人間主義の勝利を空想したものであった。そういう闘いの文学が支配的な勢力となったほどの新しい時代気運の躍進が、それの枉屈故に憤ろしい悩ましさを感じていたこの作者の気もちを、明るくほぐしたのであろうと同時に、その頃、『道草』の中でもあれほど苦にしていた教職を去って朝日新聞に入社し、ひたすら創作に専心することが出来るようになった、その心境的な明るさもそこに投影していたのであろう。前に『漱石の芸術』から引用して置いた、矢つぎばやに発表した作品へのすばらしい反響も、むろん

その心境的な明るさを支える有力な要素であった。『虞美人草』など、そういう明るさの集約的な表現と見てもよいほどの作品であった。

が、すでに自然主義がその立場のみじめなまでの敗北を味いつくさねばならぬ社会であり時代であった。漱石のそうした心境的な明るさもそう長くは続かなかった。その後『三四郎』を経て、『それから』に行った彼もまた、その立場のみじめな敗北を描かねばならぬようになった。そうしてその次の『門』では、闘い敗れた後の淋しく悩み多い世界を、しみじみと眺め入る作者であった

のである。あくまでも華やかな浪漫的作風をもって出発した作者は、この『三四郎』以後の三部作の間に、厳しいリアリズムを身につけたのであったが、そのリアリスト漱石がまず見たものは、こうしてやはり当時の自然主義作家の多くが見たものと、同じものでしかあり得なかったのである。その時代としての典型的な問題が――或る社会風景が、そこにあったのであることが知られよう。

しかも、その後修善寺での大患を経験した後の『彼岸過迄』において、この作者のリアリズムは、そうした典型的な社会風景の中の、見るべきものをほとんど見尽す

ところにまで達したのである。梗塞的な生を余儀なくされる国民一般が、それぞれの個性的な相違は持つにかかわらず。等しなみに社会の中樞的な動きからしめ出されて、或は逃避的に、或は逸脱的に、或は無責任に、それぞれ切り離された片隅の生活に落ちこんで行くかたちが、十分明確にではなかったけれども、とにかく或る程度の有機的な連関をもって、眺めわたされたのである。その頃にはもうそろそろ心境主義化していた自然主義一般には、この綜合的な人間（或は社会）観察はもう望めぬものであった。遅れて自然主義と歩調を合せはじめた

漱石は、こうして早くも当時の自然主義一般を乗りこしたのである。明治四十五年のことであった。自然主義の心境主義化がそれの敗北的変質であったとすれば、漱石がかえってその本道をそのままに押し進んだものともいえる。

が、その本道をそのまま押しつめ尽して行くことは、『彼岸過迄』の世界を十分明確に――或は渾熟的に統一化することの出来なかった漱石自身にも、やはり出来なかった。彼はそこにその生を梗塞された者の苦悩と悲哀と、一人一人に切りはなされた生活の淋しさを見尽した。

にもかかわらず、それをそうした問題として理解するかわりに、そうした苦悩や寂寥の奥に、人間の罪深さを見出したのである。『彼岸過迄』の最も主要な人物である須永市藏は、徹底した主我的自由主義者であった。それ故に社会的な梗塞を最も厳しく感じ、そういう社会と調和的に生き得る人々との阻隔を痛感せずにはいられなかった。衝突と齟齬と孤独感とが当然彼の生活にはついて廻った。そういう彼は、結婚しようと思っているのでもない一人の女性のために、他の男の脳天に重い文鎮を打ちこむ幻想におそわれて、そういう自分のすがたにふる

え上ったのである。そうして、それほどにまで我執の強い自分であるが故に、周囲との衝突も齟齬もそれ故の孤独も、すべて必至のものとなるのだと考えたのである。そういう反省の苦しさから旅に逃れた彼は、そこで旅行者のような執着のない心で生きねばならぬことを悟るのだが、そこに、社会的な梗塞とか思想的立場の阻隔とかいう客観的な世界の問題をも、そういうものとして考えざるかわりに、すべてを人間内部の問題に移して、苦悩の克服とか脱却の工夫とかいう方向に、その問題の解決ならぬ解決を求めようとする態度が、はっきりとあらわ

れはじめたのである。すでに述べた通りそこに漱石の限界があったわけだが、その限界性故に、当時の人間にとって最も重大な問題を、ほとんど押しつめ尽すところまで押しつめかけたその瞬間に、漱石はかえって、『野分』や『虞美人草』の時代はいうまでもなく、鬱屈時代以来ずっと持ち続けて来たその立場からの闘いを放棄しようとすることになったのである。自然主義の本道を押し進めたかとも見える『彼岸過迄』が、こうして一方には彼における大転廻のきっかけとなってしまったのである。

こういう転廻の直接の動機に、修善寺における大患を

考える小宮豊隆説は、或る程度正しいであろう。それまで自分の周囲を憎むべく反撥すべきものと見ていた漱石は、大患以来親切にして頼むべき周囲を見出した。そこからの反省が、周囲に対して触着と齟齬とをのみ感じていたそれまでの自分の、我の強さに思い到らせたのである。死に直面した後の心境の静かさから、それまでの動騒的だった自分を醜かったと感じもしたであろう。そうして一たんそのように感じたとなれば、それをとことんまで突きつめねば止まぬ誠実一途なはげしさと、ともすれば「一番」とか「大」とかいう強調的表現に傾きたが

る性向とを持っていた漱石なのである。大患後のふとした反省がこの大転廻のきっかけとなったという小宮説に、或る程度の真実は含まれていたに相違ない。作品の評判がよければ、明るくなり得たような一面もあった漱石なのである。

が、それがより以上に当時の一般的思考の限界の問題であったことは、すでに『道草』そのものの説明の中に触れて来た。そういうものであったからこそ、少し遅れはしたけれども、自然派の代表作家田山花袋などでも、自然主義敗北後の絶望と頽廃の中から、宗教的脱却を口

にして立上って来たし、その頃には宗教文学への気運なども時代一般に濃化したのであった。そういう方向には最も縁遠い人であった島崎藤村さえ、やがて『新生』などにあれだけの宗教への関心を示すようになったではないか。すでに『それから』と『門』とでその立場の敗北を見、それを必然としか感じ得なかった漱石が、その必然の底を探るところから、そうした方向への逸脱を示したのは、個人的なきっかけはともあれ、やはりそうした時勢的必然の枠を出られなかったのである。誠実一途な探求精神と、頽廃や転落への曲折を経るにはあまりに健

康だった人となりが、彼をしてまずそうした気運の露頭を示す、一種の先駆者たらしめたということになるのかも知れない。

そのかわりに、そうしていち早く中世的な宗教主義への回帰を示した漱石が、その立場の総括的な進歩性にもかかわらず、脱却しきれぬ旧時代的なもののかげをも、相当色濃く残していた人であったことも、そこにおのずから髣髴されるわけであろう。そのリアリズムや心理解剖の精刻さにもかかわらず、比較的多くの強調的表現などに傾いていた彼が、その美意識においては旧めかしい

装飾意識や作為主義を払拭しきれなかったことも、相関的に思い出されてよいことであろう。そういう点では決して新しいばかりの作者ではなかったのである。

が、それはとにかく、漱石は『彼岸過迄』を契機として以上のような大転廻を示した。それから後の彼の道は、この『彼岸過迄』にすでにおぼろげながら提示されていたところを、一足一足踏みしめながら上りつめて行ったようなものであった。そのことは、『彼岸過迄』についての以上の説明が、すでに『道草』の世界を半ば以上物語っているものになっていることからでも、自然推知さ

れよう。この二作の間に、彼は『行人』において須永の孤独地獄苦をもう一度検討した。そうしてその主人公一郎の苦悩が、「所有しきる」という征服欲的な我執から生れているものであること、その苦悩を脱却するためには、むしろ自分が完全に他に所有されてしまうこと、つまり自我意識のない恍惚的な状態に入るよりほかないことを、確認した。「あなたまかせ」の、支配されきったものの心の平安を思う気もちが、ここにややはっきりと具体化されたともいえよう。次の『こゝろ』では、我執といつわり多い罪深さとの故に、友人を自殺させた主人

公の告白が語られた。すでにいわれている通り「懺悔」という方法がここで試みられたのである。その方法と、『彼岸過迄』や『行人』以来の主題とが、渾熟的に融け合わされたところに『道草』の世界があったのであることは、もう説明する必要もあるまい。次の『明暗』では、小ざかしく我執的に生きる者には、ついに心の平安のあり得ないかたちと対置することによって、「則天去私」の境地のありがたさを描こうとしたのであったらしいが、周知の通りこれは完結するまでに到らなかった。従って、「則天去私」の境地の「明るさ」が作者によって

十分具体的に描き生かされるところまではついに行き着かずに中断されてしまった作者の生涯であったわけだが、『彼岸過迄』以後の行程が、もっぱらそこを目ざして一歩一歩と踏み固められて行ったものであることは、はっきりと知られるわけだと思う。『道草』はいわば実験的なそういう一歩一歩が十分踏み固められたところで、手なれた主題を自分に即してしかも実験ずみの方法をもって描き生かそうとしたものであったのである。それが隙間なく緊密な構成と渾熟した趣とをそなえた作品となったのも、極めて必然であったわけであろう。

このことは、一方からいえば、漱石がただ一つの題目にばかり執着し続けて、その意味では結局似たような作品ばかりをくりかえしていたのであることを思わせる。それは作品全体としての題目の相似や連関性ばかりにあらわれている特質なのではなく、例えば須永に文鎮を振りまわす幻想を起させた作者が、『こゝろ』の主人公には友人を自殺させ、『道草』の健三には目の前にいる島田の死を思わせる、そうしてそれらがいずれもその主人公たちに、自分の我執の強さや罪深さを痛感させる契機となっているというような、部分部分の取扱い方にも、

従って作品全体の構成にも相似たもののくりかえしを多くさせている点などにも、同じように認められる特質であったのである。それがこの作者の世界を狭く、あまりにも単一なものであるかに思わせるのではないかと思う。そういう点では、この作者は鷗外などとははっきり対比的だったのである。が、鷗外の場合はいわない。この作者に関する限り、それが決して作者の欠点となっていたのではなく、かえってそれが例の一途な誠実さとぴったり結びついた特質になっていたのである。つまりこの作者は、一度つかんだ題目を、究め尽し描き尽すまで

は、その題目への追求を止めなかったのである。しかもその題目が容易に処理出来ぬ困難なものであったのである。だから当然くりかえしや積み重ねが起らねばならなかったのである。いわば作者はその一点にすべてをかけて、自分の腑に落ちざるまでそれへの体当りをし続けたのである。その誠実さが漱石をあれほどの作家にしたともいえるのであり、その一つ一つの作品がそれだけにまた単なる思いつきでない、全生命的なものとなっていたわけなのである。その意気込み故に行き過ぎているような場合はあっても、その作品にぶつかってはぐらかされ

るような場合は絶対にないのである。[註2] 珍しい誠実さであり一途さであったと思う。そういう作家が、なかんずく誠実いっぱいに自己吟味をしとげようとした『道草』が、それ故の若干の行き過ぎは孕みながらも、明治世相における多角的な問題の底深くくぐり入ったと同時に、十分の厚みことを持った作品となったのも、極めて当然なことであったと思うが、それよりも、それほど誠実一途につきつめられた道の終極が、結局敗北的ないし逸脱的なものでしかあり得なかったところに、明治社会の悲劇の深刻さが強く感じられるのでなければならない。

『猫』の苦渋さを自ら糊塗しようとした笑いから、この敗北的逸脱的な結論まで、一見華やかであった漱石の道も、また苦悩多いものであったことを思わずにはいられないのである。

註1　漱石の示した学問への批判は、明治文化のあり方に対する批判として、も少し重視すべきものであっことが、この稿ではまだ十分につかめていない。「『行人』と『こゝろ』の実験」で同じ問題に多少触れているので、参照していたゞきたい。それは、そ

の批判のし方如何によっては、その前に啄木の道のようなものさえひらけて来たかも知れないことになる――その微かな可能性を『明暗』における小林の点出に見ることが出来るともいえよう――のだから、これは漱石にとって極めて重大な転廻点を示すものであったわけだ。それだけにその転機の十分正しく生かされなかったことを、措しまずにはいられないのである。

註2　初期の作品には必ずしも全生命的といゝ得ないような性質のものがあったことを念頭においても、

なおこういういゝ方が許されるであろうと思う。

（二十二年八月末日　青磁選書　解説）

日本文学電子図書館

夏目漱石の作品

著　者：片岡良一
制作者：宮澤一郎
出版社：鷺の宮書店
昭和42年12月15日 印刷
昭和42年12月20日 発行

日本文学電子図書館